

博 多 52

— 第82次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第449集

1 9 9 6

福岡市教育委員会

博 多 52

— 第82次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第449集



遺跡略号 HKT-82
調査番号 9342

1996

福岡市教育委員会

序

古くから大陸との文化交流の玄関口として栄えた福岡市には、多くの文化財が分布しています。本市では文化財の保護、活用に努めていますが、各種の開発事業によってやむを得ず失われる文化財については、記録保存のための発掘調査を行っています。

本書はそうした遺跡のひとつで、博多区博多遺跡群内のビルディング建設に先だって行った発掘調査の成果報告書です。

発掘調査の結果中世から近世に亘る博多の繁栄を示す多くの遺構、遺物が見つかり、貴重な成果を得ることができました。

発掘調査から整理、報告にいたるまでご理解とご協力をいただいた第一法規株式会社を中心とする多くの方々にたいし、心からの感謝をいたしますと共に、本書が文化財に対する認識と理解、更には学術研究に役立てば幸いに思います。

平成 8 年 3 月 31 日

福岡市教育委員会

教育長 尾 花 剛

例　　言

1. 本書はビルディング建設に先だって、福岡市教育委員会が1993年10月18日～12月22日にかけて行った博多遺跡群第82次調査の報告書である。
2. 検出した遺構については、調査時には遺構を示す記号Mを付して検出順に通し番号を付した。本書では、本文及び遺構の挿図中ではこの番号からMを除き、遺構の性格を示す用語を付して、井戸1、土壙2のように記述し、その他の挿図中で出土遺構を付す場合は、煩雑を避けるため記号Mをそのまま使用する。
3. 本書で使用する方位は磁北である。
4. 本書で使用した遺構実測図は宮井善朗、是田敦、秋丸亜佐子、佐藤志津が作成した。製図は宮井、林由紀子が行った。
5. 本書で使用した遺物の実測図は宮井の他、中暢子、西村智道が作成した。また製図は宮井、中、林由紀子が行った。
6. 本書使用の写真は宮井が撮影したものである。
7. 遺物実測図の番号は収蔵時の登録番号である。
8. 本調査に関する記録、遺物類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵、管理されるので、活用されたい。
9. 本書の執筆、編集は宮井が行なった。

本文目次

I.はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査体制	1
II. 遺跡の立地と歴史的環境	1
III. 調査の記録	
1. 調査の概要	3
2. 検出遺構	3
3. 出上遺物	9
4. 小結	24

挿図目次

Fig. 1 調査区位置図 (1 : 4000)	2
Fig. 2 I面遺構配置図 (1 : 160)	4
Fig. 3 II面遺構配置図 (1 : 160)	5
Fig. 4 I面検出遺構実測図 (1 : 60、1 : 30)	6
Fig. 5 II面検出遺構実測図 (1 : 40)	7
Fig. 6 II面石組遺構実測図 (1 : 30)	8
Fig. 7 出上遺物実測図 1 (1 : 3)	10
Fig. 8 出土遺物実測図 2 (1 : 3)	11
Fig. 9 出土遺物実測図 3 (1 : 3)	12
Fig. 10 出上遺物実測図 4 (1 : 3)	13
Fig. 11 出土遺物実測図 5 (1 : 3)	14
Fig. 12 出上遺物実測図 6 (1 : 3)	15
Fig. 13 出上遺物実測図 7 (1 : 3)	16
Fig. 14 出上遺物実測図 8 (1 : 3)	17
Fig. 15 出土遺物実測図 9 (1 : 3、1 : 4)	18
Fig. 16 出土遺物実測図 10 (1 : 3)	19
Fig. 17 出上遺物実測図 11 (1 : 3)	20
Fig. 18 出土遺物実測図 12 (1 : 3)	21
Fig. 19 出土石製品、銅錢実測図 (1 : 2)	23

図 版 目 次

- P L . 1 (1) I面全景 (西から)
(2) 井戸19、20 (東から)
- P L . 2 (1) 井戸19井戸枠 (北から)
(2) 井戸17 (西から)
- P L . 3 (1) 井戸64 (南から)
(2) 井戸40 (西から)
- P L . 4 (1) 井戸12 (南から)
(2) M11~12上層
- P L . 5 (1) 井戸86 (西から)
(2) 土壙9 (北から)
- P L . 6 (1) 土壙16 (西から)
(2) 石積遺構 (西から)
- P L . 7 (1) 石積43 (南から)
(2) 石積93 (南から)
- P L . 8 (1) II面西半区全景 (西から)
(2) II面東半区全景 (西から)
- P L . 9 (1) 土壙396 (西から)
(2) 土壙422 (東から)
- P L . 10 (1) 土壙411、410 (東から)
(2) 石組453
- P L . 11 (1) 石組453 (南から)
(2) 石組453 (西から)
- P L . 12 (1) 石組375 (西から)
(2) 石組375 (北から)
- P L . 13 (1) 石組445 (北から)
(2) 出土遺物 1
- P L . 14 出土遺物 2

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

1991年9月10日付けで、第一法規株式会社より、博多区下呂服町内のビルディング建設予定地における埋蔵文化財の有無についての事前審査願いが出された。申請地は博多遺跡群内に位置し、いわゆる「息の浜」砂丘上に立地しており、遺構、遺物の遺存が予想された。また元寇防壁の推定線にも近接していたため、埋蔵文化財課では審査願いを受けて91年9月17日に試掘調査を行なった。その結果申請地内には中世末から近世の遺構、遺物、包含層が検出された。この成果をもとに協議を行ない、工事によってやむを得ず破壊される部分については発掘調査を行ない、記録保存を図ることとなった。発掘調査は、第一法規株式会社との委託契約により、福岡市教育委員会埋蔵文化財課がこれを行なうこととなり、1993年10月18日に着手し、12月22日に終了した。

2. 調査体制

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 井口雄哉（前） 尾花 剛（現）

調査総括 埋蔵文化財課 調査課長 折尾学（調査年度） 荒巻輝勝（整理年度） 第2係長 山崎純男（調査年度） 山口讓治（整理年度）

調査庶務 埋蔵文化財課第1係 吉田麻由美（調査年度） 西田結香（整理年度）

調査担当 埋蔵文化財課第2係 宮井善朗

調査作業 中川敏夫 野村道夫 三浦力 蜂須見 相良謙一 川上すぎえ 菅野シゲ 村田トモヨ
松岡芳江 秋丸亜佐子 佐藤志津 張本弘美 藤本佳子 浜口喜代子

調査補助 是田敦（福岡大学）

整理補助 中暢子 西村智道

整理作業 藤信子 佐々木涼子 大石加代子 林山紀子 太田順子 秋丸亜佐子 谷口美由紀 森田
めぐみ 西岡由美子

また調査時には第一法規株式会社、株式会社間組には多くのご配慮を賜った。記して感謝申し上げる次第である。また調査に当たっては福岡市教育委員会の大庭康時氏、杉山富雄氏、吉武学氏、森本朝子氏をはじめ多くの先輩、同僚諸氏から助言、指導を頂いた。深く感謝すると共に本報告書に十分活かしきれなかったことをお詫びしたい。

遺跡調査番号	9342		遺跡略号	HKT-82	
調査地地籍			福岡市博多区下呂服町357-1外		
開発面積	447m ²	調査対象面積	447m ²	調査面積	355m ²
調査期間	1993年10月22日～12月22日		分布地図番号	48-0121	

II. 遺跡の立地と歴史的環境

博多遺跡群は福岡平野の最も海岸側に位置する。西を那珂川の分流である博多川、東を石堂川（御笠川）、南を那珂川に流れ込む旧比恵川によって画され独立した一角をなしている。地形的には縄文海進以後に形成された砂丘列からなっている。砂丘列は三列からなり、内陸側から砂丘Ⅰ～Ⅲと呼称

されている。また砂丘Ⅰ、Ⅱを博多浜、砂丘Ⅲを息の浜と呼ぶこともあり、「息の浜」は文献に見られる歴史的呼称もある。今回の調査地点はこの息の浜の海岸側の端部付近に位置している。

博多は古来より対外交渉の要地として発展してきた町であるが、市街地の拡大とともに、その中心が博多浜地区から息の浜地区に移っていったことが、これまでの発掘調査等によって、次第に明らかになってきた。ここでは博多遺跡群全体の概要や博多浜地区的調査成果については他書に譲ることとして、息の浜地区で行われた調査成果について概観しておくこととする。

息の浜の調査については、小規模な2件の調査を経て（5次、12次）、はじめて本格的に行われたのは網場町の42次調査である。またその隣接地では60次調査が行われている。その成果によると、息の浜の内陸側斜面では、11世紀を前後する頃に陸化が完了し、11世紀前半で小規模な遺構が見られるようになる。その後100年ほどの断絶があって12世紀後半頃から市街化が本格化するという。また中世の町割は、検出された溝などの方向の分析から、博多浜とは異なる地形に規制されたものであったと推定されている。この2件のいわば息の浜中心部の調査では、息の浜の最盛期が14～16世紀にあることも明らかになっている。

現在の昭和通りの北側についても近年次第に調査が増加してきた。その内でも古門戸町で行われた68次調査では鎌倉時代13世紀後半～14世紀前半とされる護岸用の石積遺構が検出されている。これはいわゆる元寇防壁との関連が示唆されている。この息の浜の北側斜面でも11世紀後半頃から遺物が見られ、12世紀後半から遺構が増加する。奈良屋町の69次調査は現在最も海側で行われた調査で、16世紀以降の遺構が検出されている。古門戸町の46次調査は昭和通りに面しており、海側斜面に立地している。やはり12世紀以降、遺構が見られるようになり、15世紀まで切れ目なく継続するという。75次調査は奈良屋小学校に隣接した地点であるが、16世紀から17世紀にかけての遺構、遺物が出土している。この他現在整理中であるが、奈良屋町で行われた83次調査は、1,000m²という博多では比較的大規模な調査で、成果が期待されている。

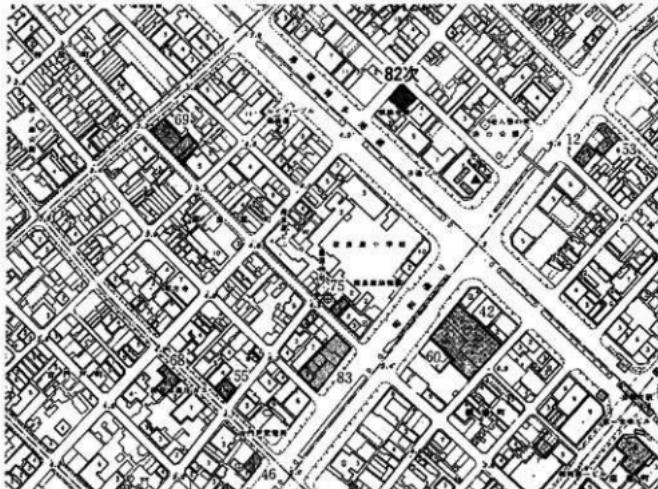


Fig. 1 調査区位置図 (1 : 4000)

III. 調査の記録

1. 調査の概要

今回調査地点は、博多遺跡群の中でも「息の浜」とよばれる最も海側の地区に属し、その北端近くに位置する。ただし、地山面である黄白色砂層は調査区内では北側に傾斜すると言うことはなく、ほぼ平坦であった。また先述したように地山面は風成砂ではなく水成の堆積によるもので、おそらく海浜の砂洲に当たる箇所と考えられる。調査開始前の土留め工事などのため土層の観察は十分に行えなかったが、試掘時及び調査時の所見から、大略次のように考えられる。現地表面から1m弱までが、近現代の建物基礎などによる搅乱である。その下に近世から近代の遺物を含む暗褐色の砂層が見られる。層の厚さはやはり1m程である。その下に暗褐色の砂層が20~30cmほど堆積しており、これがⅠ面とⅡ面を画する層になる。この包含層に含まれる遺物はFig. 14、15に示している。土師皿の径は11cm、小皿の径は6~8cmほどである。また陶磁器としては青花碗B群、皿C群、稜花口縁の青磁皿、朝鮮王朝陶器碗などがある。これらの遺物から包含層の形成時期は15世紀後半~16世紀前半頃と考えられる。ただ、調査区内で出土した遺物は、Ⅰ面検出遺構中の明らかな近世遺物を除くと大きな時期幅は持たない。従ってⅡ面検出の小規模な遺構群にもⅠ面検出の近世遺構にもこの包含層の遺物が多量に混入しているものと考えられる。大略Ⅰ面遺構を近世(17世紀以降)に、Ⅱ面遺構を中世末期(15~16世紀)に考えておきたいが、調査時には当初から地山面の遺構の調査のみと考えていたものが、重機による包含層直上までのすき取り後、人力による包含層の除去中にⅠ面の遺構を検出したため急遽二面の調査を行うこととした経緯から、包含層の残存は調査区内で一样でなく、Ⅰ面検出とした遺構にも実際は地山面での検出遺構が含まれている。同様にⅡ面の遺構にもⅠ面で検出しえなかつた遺構も含まれていると思われる。

2. 検出遺構

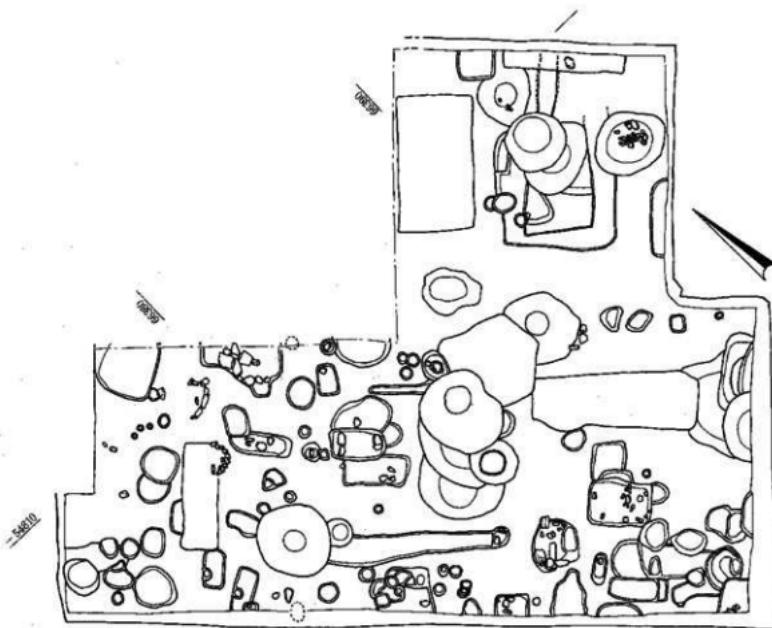
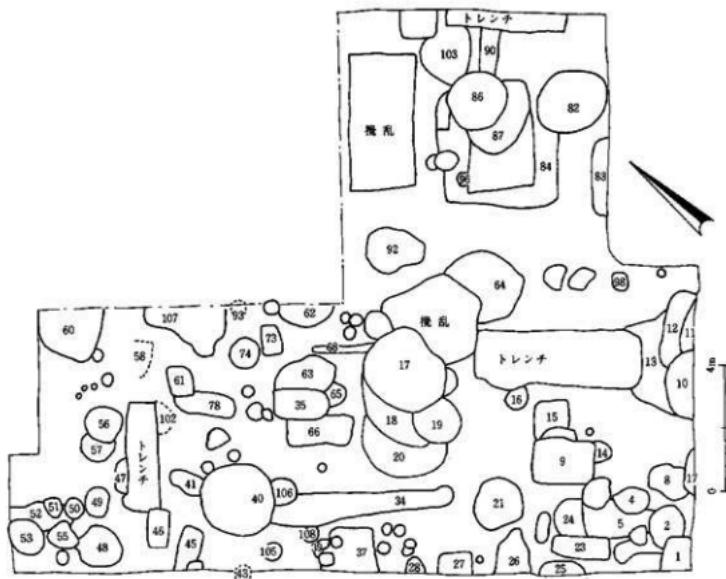
Ⅰ面で検出した遺構としては井戸、土壙、溝、石積遺構などがある (Fig. 2)。Fig. 2、3のうち搅乱としたのは確實に近代以降の遺物を包含する遺構である。

井戸は8基検出した。瓦組で井筒を構築する井戸19、64などの例と、素掘りの井戸40、上層で井筒痕跡が確認でき、木質の井筒と考えられる井戸12、86、17などの例がある。いずれも覆土中に肥前系の磁器等を多量に含み、近世の所産である。素掘りの井戸40、井筒痕跡の残る86、17、12は標高0.5から1mで底面に達するが、瓦組井戸の19、64は涌水が著しく底面まで掘り下げられなかった。

土壙の中には、図示した土壙9や35、66、15、23、27、78、61などのような方形ないし長方形を呈するものや、土壙10、21、50、57、60、103等のようなほぼ円形を呈するものがある。概ね方形を呈するものは甕等を敷いたり、投棄したりする例が多いようで、土壙80等もこの例であろう。また円形の土壙16はピットとした方がよいかもしれないが、土師皿、備前V期の摺鉢等が一括投棄されていた。

溝についてはほぼ現在の町並みと方向を同じくする溝34が注意されるが、延長6mと短く、また深さも20cmほどと浅いため、町割に関するものの可能性は低いであろう。方形に巡る溝84は、西側では平面的に比較的容易に検出できたが、東側の土壙82、87と切りあう付近から不明瞭になる。また掘り下げていくうちに壁がやはり不明瞭になり、本来の形通り掘れたか自信はない。土壙87、井戸86に切られる内側部分を含めて、地盤的な遺構になるのかもしれない。

Fig. 2 I面構造配置図 (1 : 160)



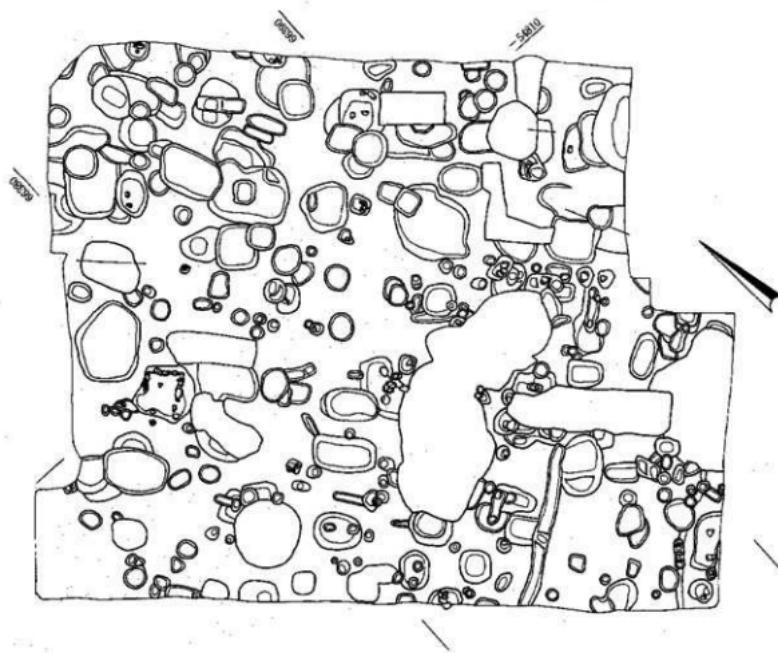
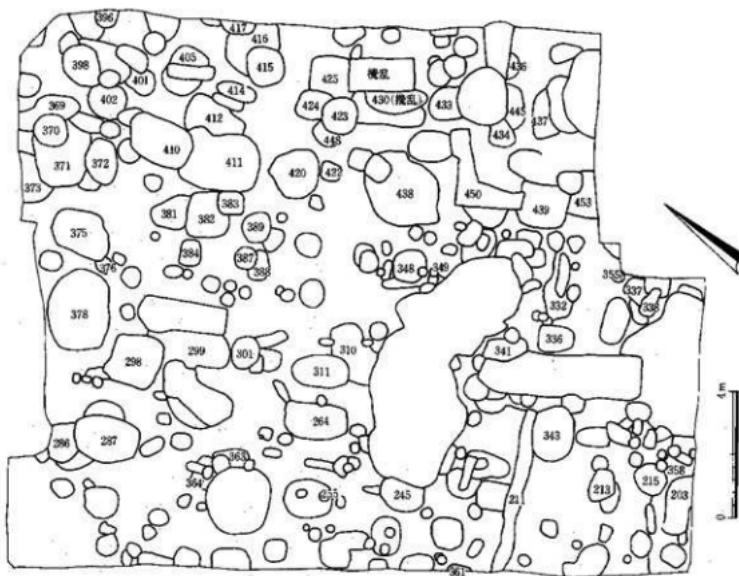


Fig. 3 II面置き配置図(1:160)

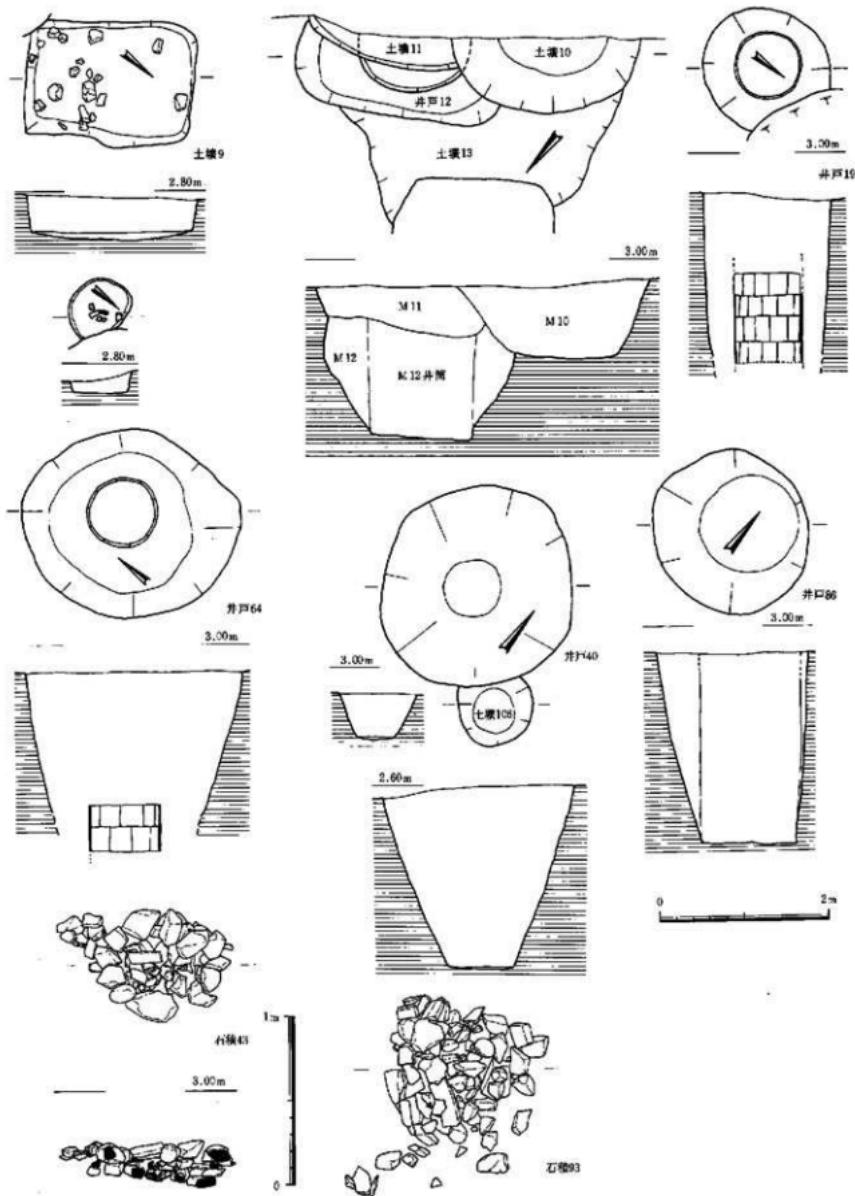


Fig. 4 I面検出造構実測図 (1:60、1:30)

I面ではこの他石積遺構を4基検出した。ほぼ円形を意識したものと考えられる石積43、102と方形を意識したと考えられる石積58、93に分けられる。石積102と石積58は周開の石しかなく、石開い遺構とすべきかもしれない。性格としては礎石の根石などが考えられ、1基の石積はL字に並ぶようにも見られる。

なおI面については近世遺構がほとんどであったため、廃土捨て場にしていた調査区の北東1/4程については調査を行っていない。

II面では中世遺構の検出が予想されたので全面調査とし、はじめに西半分を人力で包含層を除去して調査した後、廃土置場としていた東半分の土を重機で移動して、東半分を調査した。検出した遺構は土壙、溝、ピット、石組遺構などである。

土壙は大小様々あるが、規模の比較的大きい土壙は北東側に集中している。形態にはほぼ円形を呈するものや方形、長方形に近いものがあるが、比較的規模の大きい土壙410、411、412、420、438等は不定形を呈するものが多い。遺物が投棄されている土壙417、397等の規模が小さいのはI面と共通する。南西側には小規模なピット等が多い。

石組遺構は3基検出した。石組375は調査区北端で検出した。ほぼ方形の掘方の中に、奥壁と両側壁の三方に組む形のもので、北側は当初から無かったものと考えられる。最下段にやや大形の石を掘え、その上段に人頭大の砾を2~3段乗せている。当初の深さは不明であるが、掘方の状況から見てこの上にはそれほど高くは組んでいないと思われる。石組445は奥壁のみの残存である。I面で検出した近世後期と思われる井戸86に切られているので、該期より古いことは確実である。石組453は調査区南端で検出した。石組375と同様三方向の壁からなるものであろう。掘方もほぼ長方形を呈する。

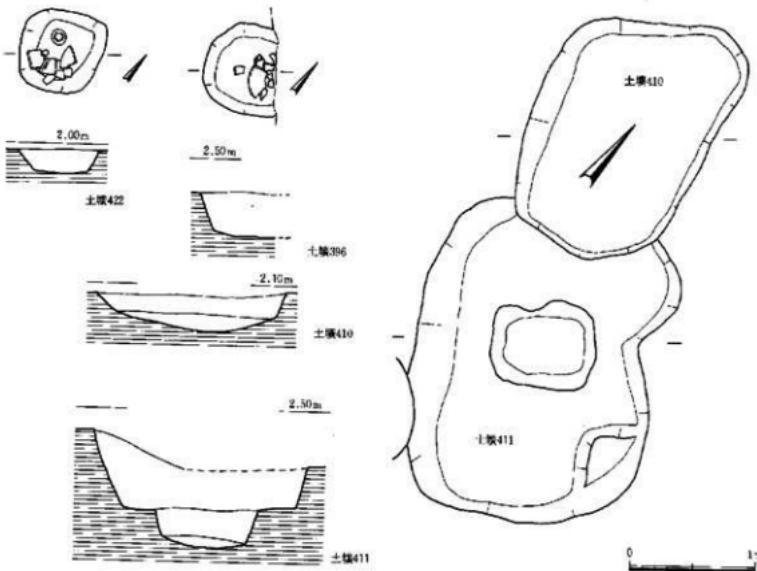


Fig. 5 II面検出遺構実測図 (1:40)

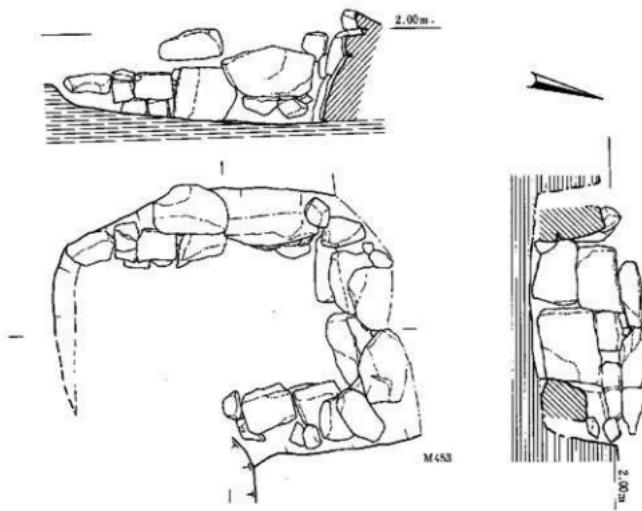
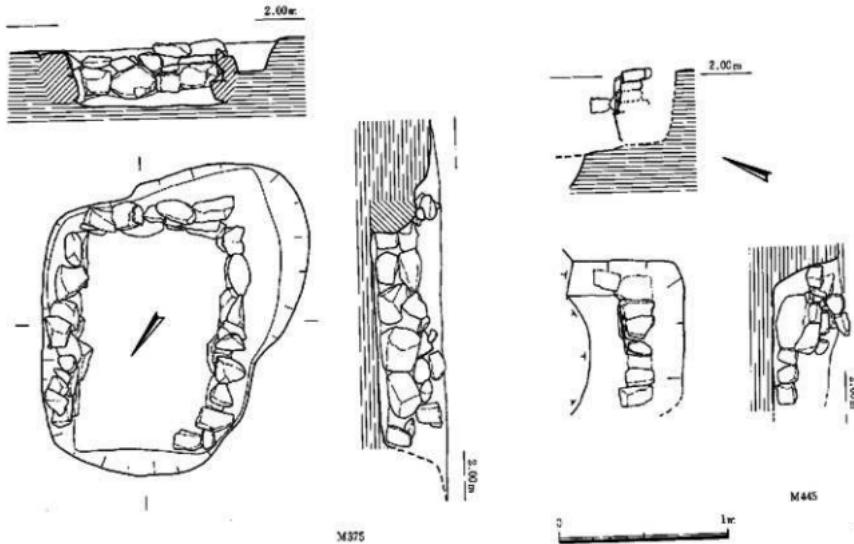


Fig. 6 Ⅱ面石組造構実測図 (1 : 30)

石組375に比べると使われている石がやや大きめで、形も整えられているようである。腰石の下に礎を入れ安定を測っている部分もある。これらの石組構造は、近畿の60次などの調査例や先の切り合い関係から見て16世紀代頃のものと考えられる。

3. 出土遺物

出土遺物の特徴としては、確実に近世以降に下がる遺物を別にすれば大きな時期幅が見られないことがあげられよう。Ⅱ面の不安定な砂漠を考えると、Ⅰ面とⅡ面を画する包含層とした層は生活域拡大のための整地層と考えられるが、整地の以前にはそれほど長く生活の場としては用いられていないかったのであろうか。

Fig 7～13はⅠ面検出遺物出土の遺物である。

125は絵唐津の皿である。口縁部は凹ませ、内面に草文を描く。高台部は露胎である。土師皿の径は11cmほど、小皿は6～8cmほどである。237、198、181などは山口の大内館跡等に例の多い外來系の土師皿であろう。133は陶器の小壺。暗赤褐色の釉がかかる。底部は糸切り。188は土師質の鉢である。口縁部付近と底部付近に円形のスタンプ文を巡らせ、その間を沈線の網目文で埋める。内面にはハケメが見られる。130はB群の青花皿である。以上のⅠ面検出面の出土遺物としては125の絵唐津の皿が17世紀代のものである他は包含層出土遺物と大差ない。包含層を若干削ったところで検出したせいであろう。

2は朝鮮王朝陶器の碗。3はC群の芭蕉文帯を巡らす青花皿。43は黄色がかった発色で中国製の青花とは異なり、後世の国産品であろう。26は瓦質の釜である。口縁部外面にハケメが見られる。口縁部と肩部の境に段が着く。35は陶器の篠利。黄味がかった灰色に発色している。36は粉青沙器の碗である。12は端反りの白磁皿。8は備前焼V期の指鉢の口縁部片である。(以上Fig. 7)

7は6世紀後半から7世紀代の須恵器环身である。包含層に混入していたものか。博多浜部には該期の構造が多い。9、38は白磁。10は青花皿。基底で端反りになる。37、12も青花。12は外面に簡略化された唐草文を描く。C群である。39は基底を呈する白磁皿である。40は線彫りの蓮弁を施す青磁碗。14は青花の皿。見込に花鳥文を描く。28は青花C群の碗である。外面に唐草文、見込に牡丹唐草文を描く。135は須恵器の壺である。口縁端を肥厚させる。内外面にハケメが見られる。(以上Fig. 8)

19は備前の指鉢。18の土師皿は外來系であろう。16、17の小皿と合わせ、土壤16出土の一括遺物である。小皿の径は16が6.6cm、17が7.4cm。41は基底を呈するC群の青花皿。45は褐釉のかかる施釉陶器の小壺である。17は青、赤、金の顔料で外面に「寿」字と裂宏博文、内面に龍文を描く。近世のものであろう。23、24は朝鮮王朝陶器である。見込と高台に砂目が見られる。22は胎土目が見られる青磁である。20は褐釉を施す陶器。44も褐釉で、受け口になった口縁部に釣手、もしくは把手が付く。137は土師質土器。脚付上器の脚部である。46は青花の小杯か。見込の如意雲文はF群に見られる文様である。高台内に「大明年造」と描く。49も高台内に「大明年造? (もしくは製)」を描く青花皿である。29は青花C群の皿である。外面は波濤文と芭蕉文、見込に振花文を描く。25は平面格円形を呈する耳杯のような器形である。見込に型押しで龍文を描く。138は滑石製の石鉢底部。外面にケズリ痕がみられる。47は施釉陶器の蓋。上面のみに施釉される。48は肥前系磁器の皿である。高台内に崩れた「年」字が見られる。50は青磁の皿。豊付きの釉をかき取る。砂目が見られる。139は土師質土器の壺。下面は糸切りである。51は褐釉の壺。(以上Fig. 9)

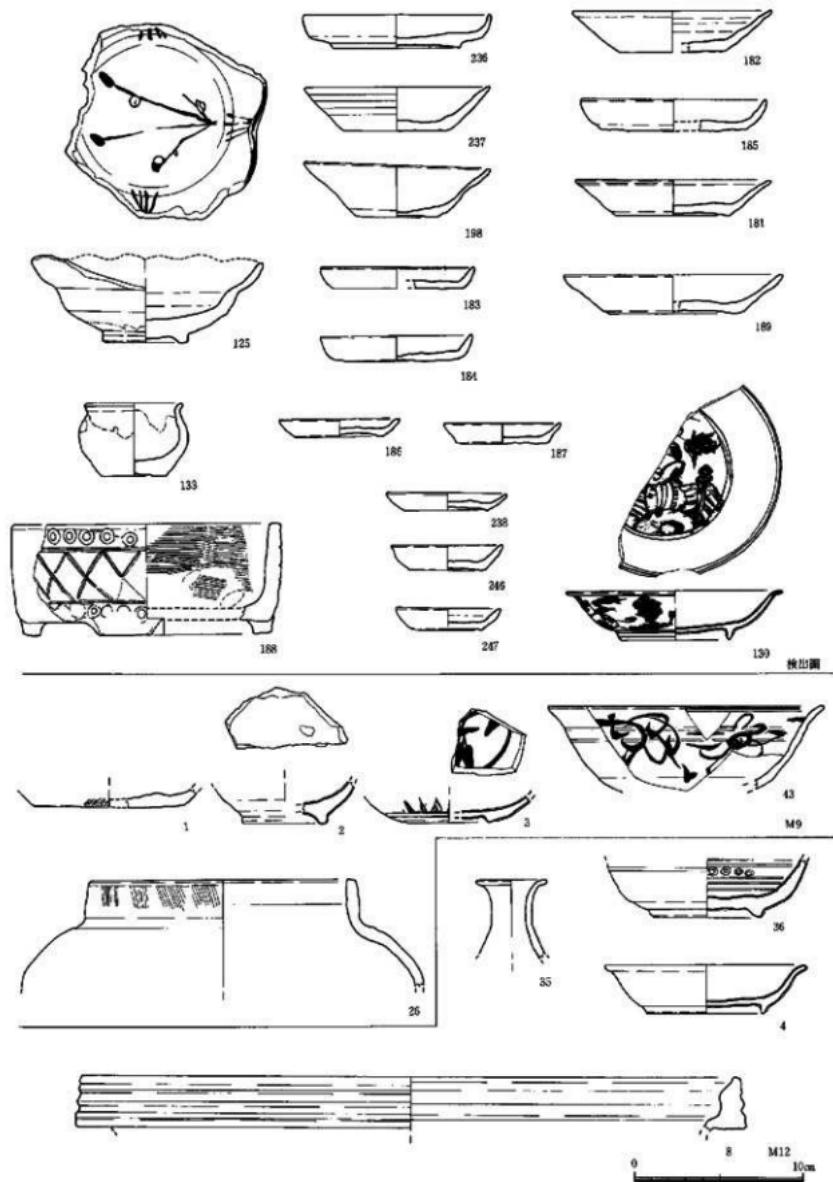


Fig. 7 出土遺物実測図 1 (1 : 3)

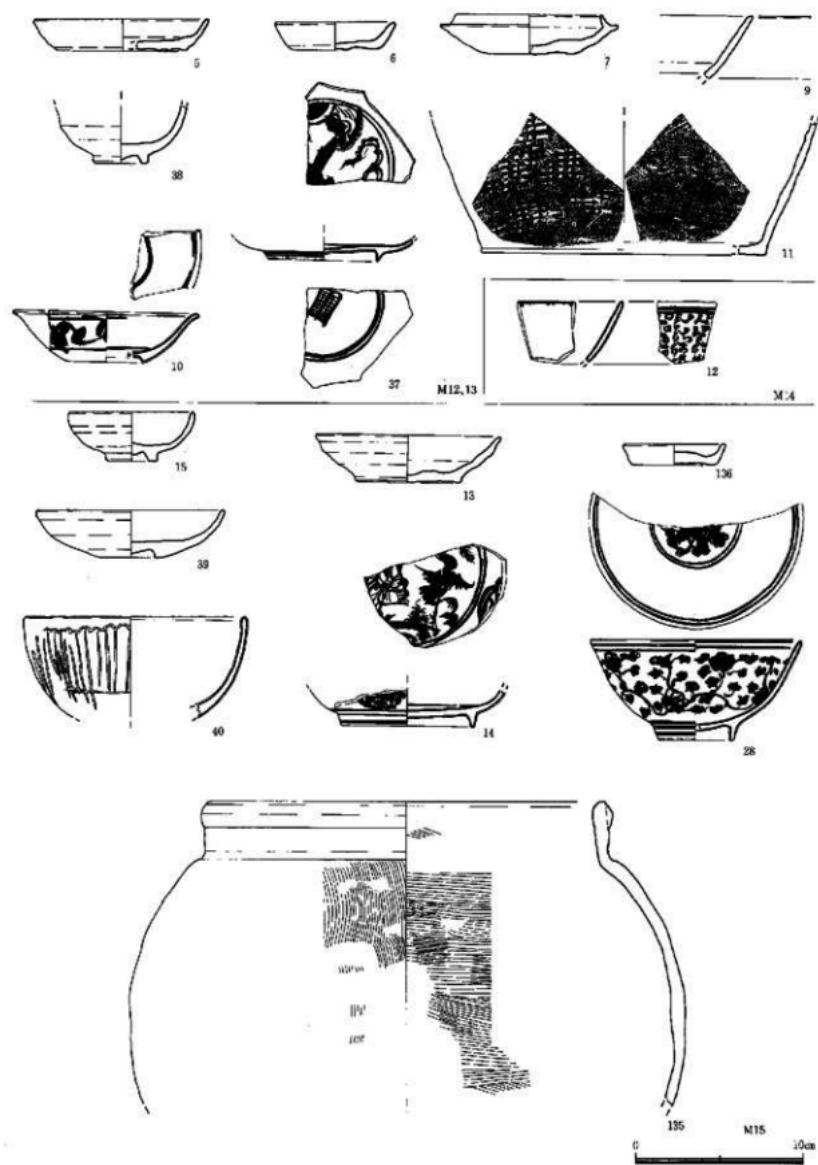


Fig. 8 出土遺物実測図 2 (1 : 3)

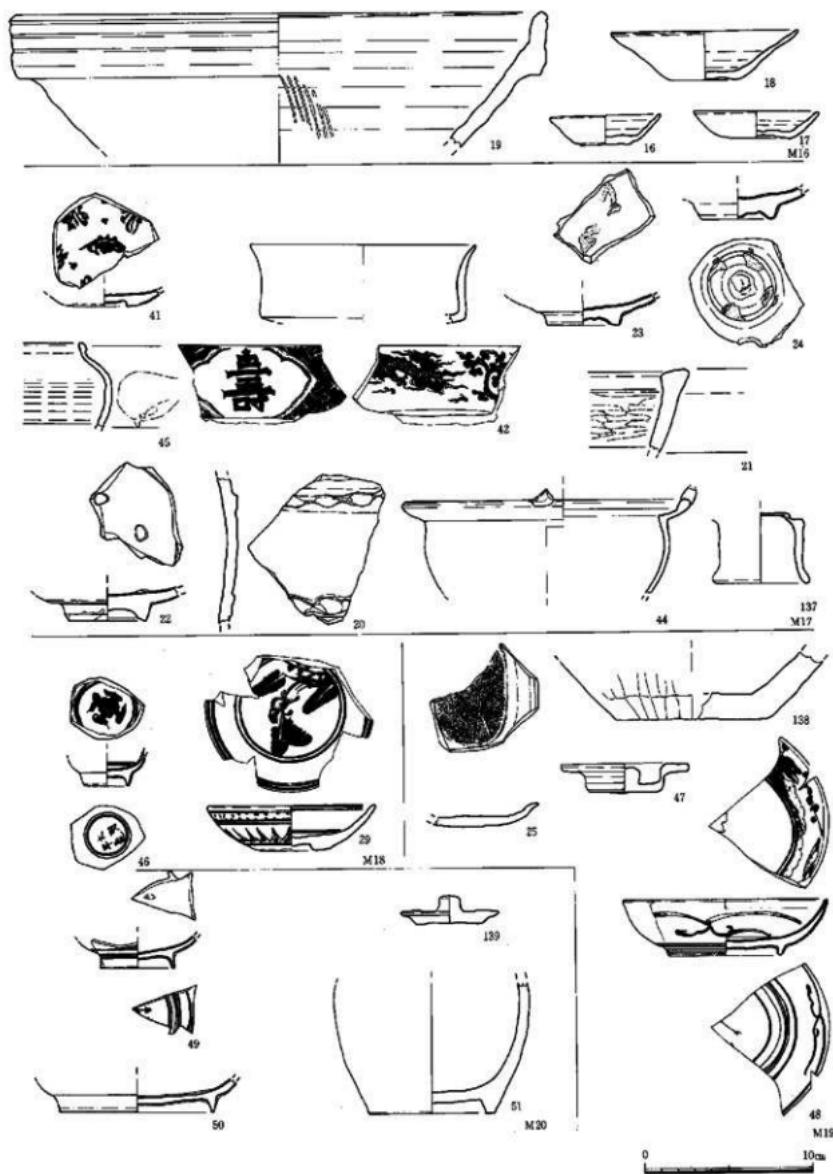


Fig. 9 出土遺物実測図 3 (1 : 3)

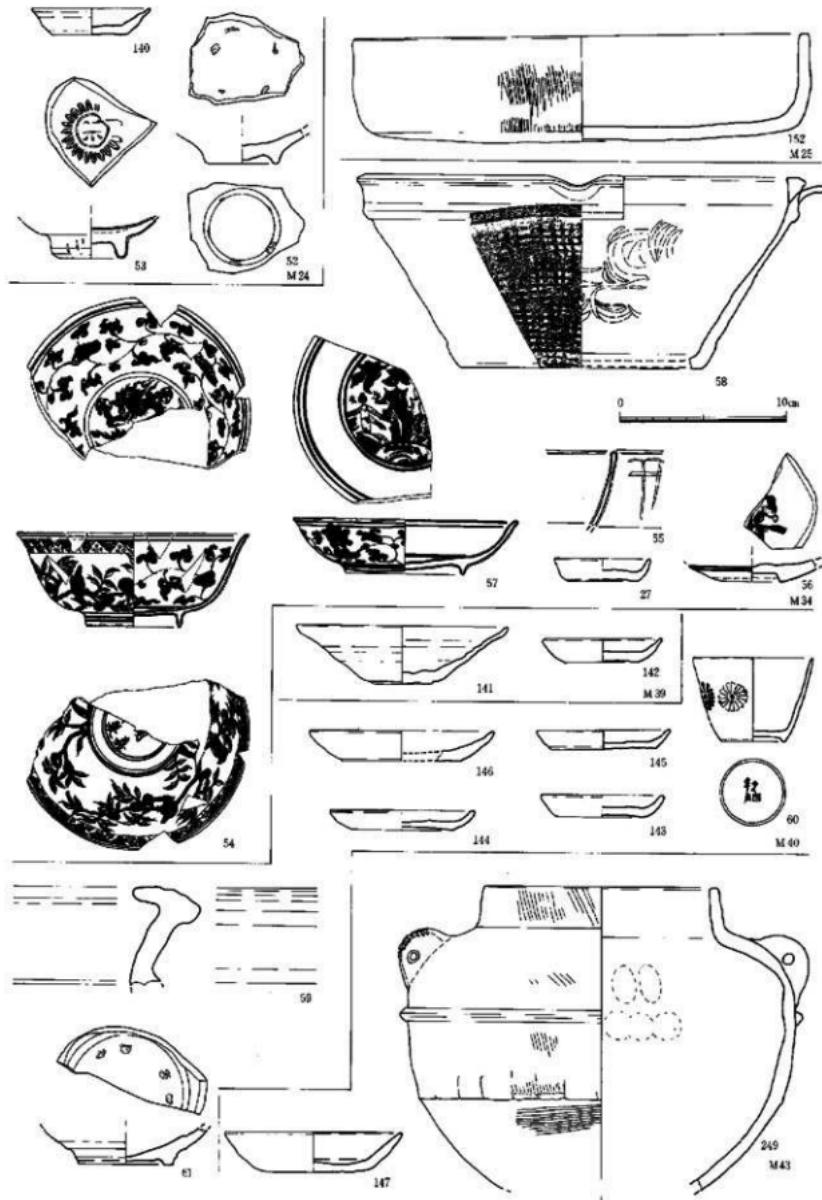


Fig. 10 出土遺物実測図 4 (1 : 3)

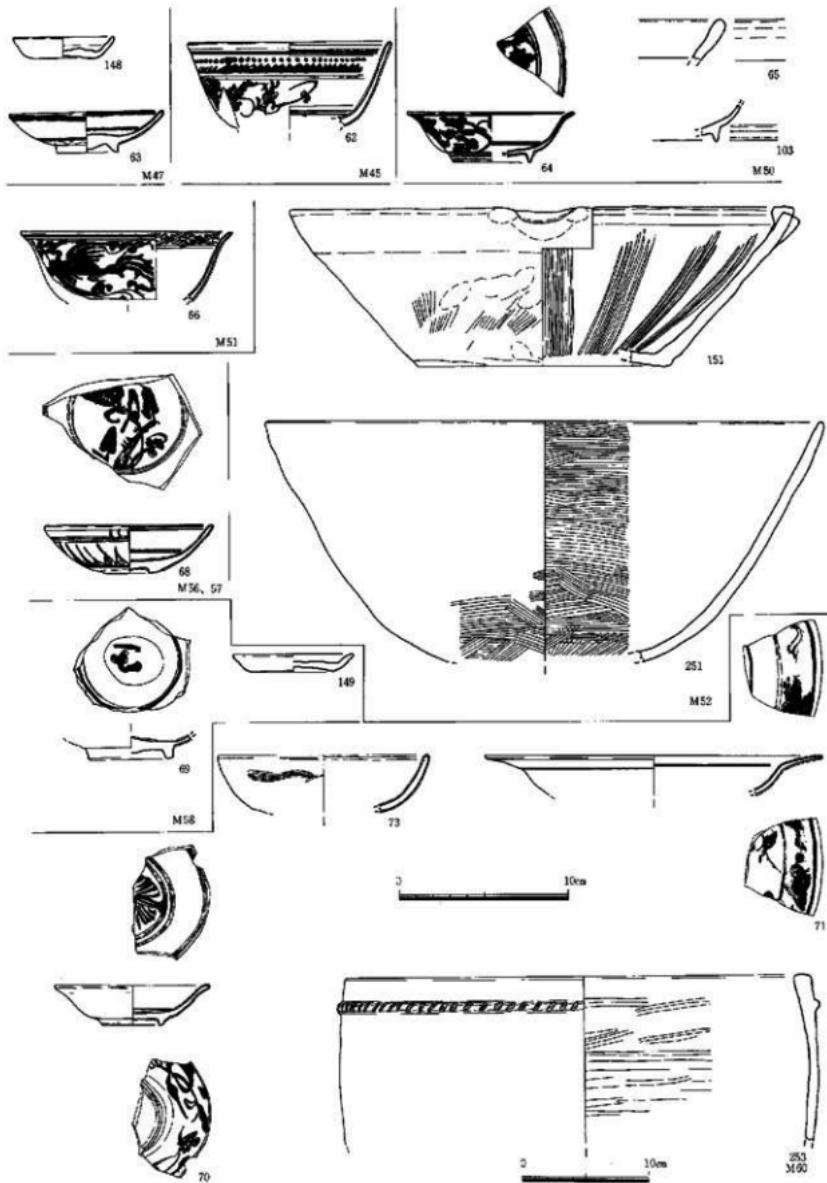


Fig. 11 出土遺物実測図 5 (1 : 3)

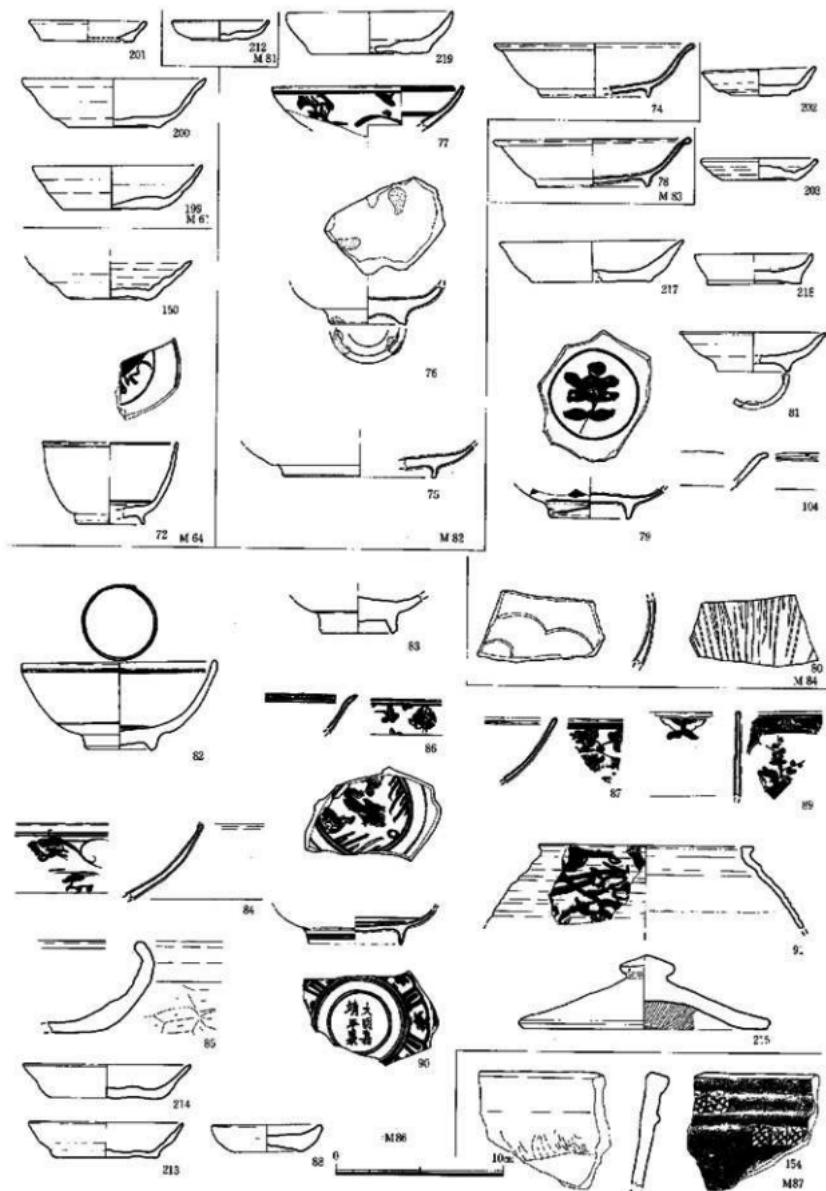


Fig. 12 出土遺物実測図 6 (1 : 3)

53は印花文を持つ青磁碗である。見込は花文である。52は朝鮮王朝陶器。見込と畳付きに砂目が見られる。152は土師質の盤である。広い平底の底部から口縁部が直立する器形である。外面はハケメを施し、部分的にナデ消している。58は陶器の片口。外面は格子目叩き。34は青花B群の碗。口縁端は端反りになる。外面は果樹文と鳥文、内面は唐草文、見込に正面形で五本爪の龍文を描く。高台内に「(大)明嘉(靖年)製」と描く。発色は鮮やかで器壁も薄く、精製品と考えられる。57は青花B群の皿である。外面は牡丹唐草文。55は連弁の青磁皿。56は基筒底の青花皿。見込は文字文ではないかと考えられる。141は外米系の土師皿。60は肥前系の杯。体部の菊文はスタンプで、高台には崩れた「大明年製」を描く。59は陶器の大甕。「て」字状に屈曲する口縁を持つ。61は黒釉陶器。畠付きは露胎で、内底部に砂目が見られる。249は瓦質の茶釜である。外面にはハケメが見られる。釣環の一つには上面に刻みを施す。(以上Fig. 10)

62は青花D群の碗である。灰味の強い渦った釉調である。口縁部外面の列点文は波濤文帯起源の文様であろう。63も青花皿である。見込は釉をかき取り、高台部も露胎である。胎土は黄味が強い。50は青花B群の皿である。65は赤みを帯びる褐色の胎土に不透明な緑色の釉がかかる陶器である。明の三彩か。66は青花B群の碗。外面に鳳凰文、内面の口縁端に四方棒文を描く。151は片口を持つ摺鉢である。251は土師質の上鍋である。内外面ハケメ調整で、外面上半をナデ消している。外面全面に煤が付着する。68は基筒底の青花C群の皿。外面に芭蕉文、見込に捩花文を描く。69は青花で胎土、

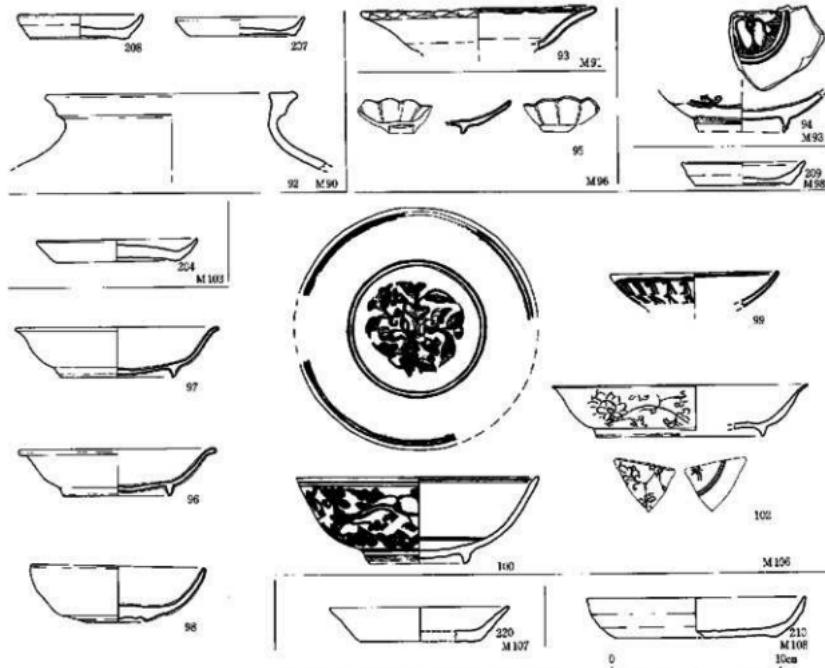


Fig. 13 出土遺物実測図7 (1:3)

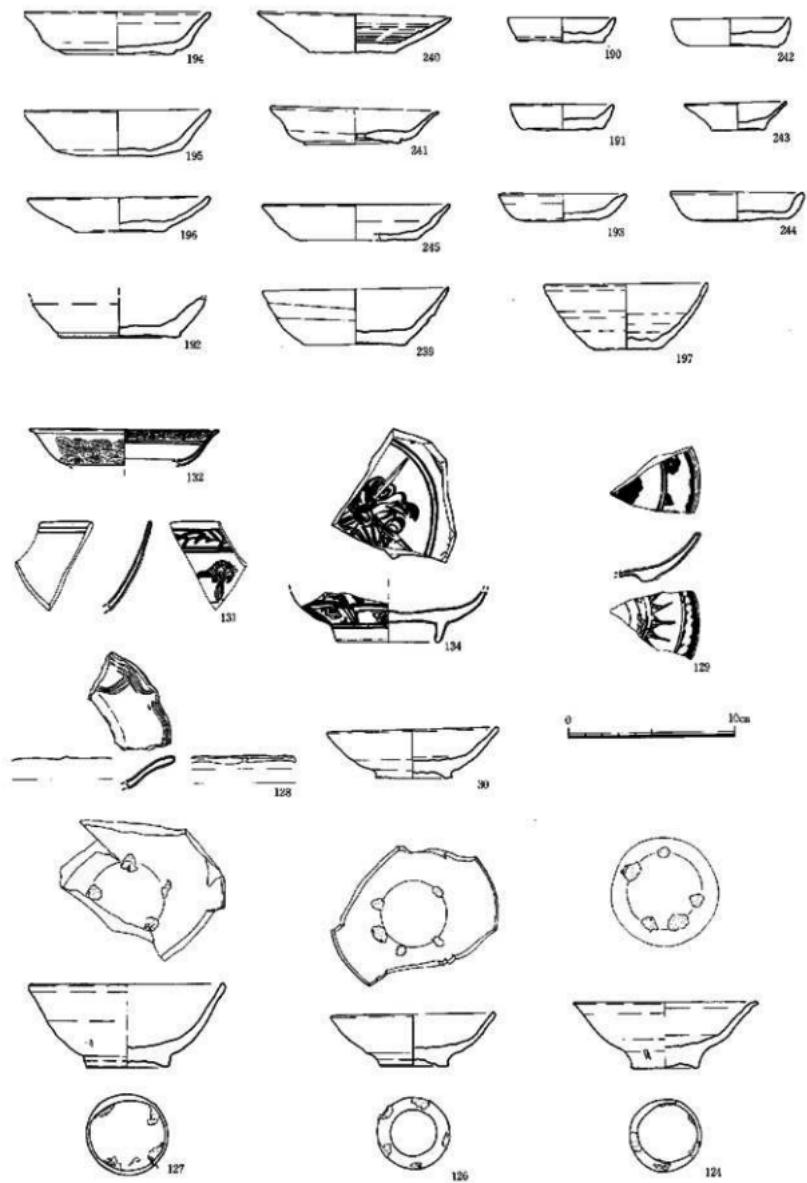


Fig. 14 出土遺物実測図 8 (1 : 3)

釉調は63に類似する。見込の周囲を輪状に釉をかき取る。高台は露胎である。73は青磁の碗である。口縁部の下に櫛状の工具で波状文を施す。71は青花F群の鉢皿である。70も青花の皿。253は瓦質の火鉢か。口縁部の下位に刻目突帯を一条巡らせる。内面は粗いハケメ様の調整を施す。(以上Fig.11)

199、200は外來系の土師皿か。72は肥前系磁器碗であろう。76は朝鮮王朝陶器碗である。75は白磁皿。77はC群の青花皿であろう。74、78は端反りの白磁皿。79は青花皿。見込に牡丹文を描く。81は朝鮮王朝皿である。104はコバルトブルーの釉がかけられた磁器で、口縁は稜花に作る。80は青磁の碗で、外面に細い連弁を施す。82は肥前系染付磁器であろう。84は小片で器形は不明であるが、肥前系の染付磁器皿か。85は陶器の鉢で、内面から外面口縁下にかけて褐色の釉を施す。83は朝鮮王朝碗である。86は明青花の碗であろう。90も明青花の碗で、外面下位にラマ連弁、高台内に「大明嘉靖年製」を描く。87は青花C群の碗であろう。89、91は近世の国産品と考えられる。89は丸みを持つ角筒型になると思われる。染付で、内面に蝶文、外面に草花文を描く。91は陶器の壺で、外面と内面上半に施釉され、外面には文様を描く。88は内面にのみ施有された陶器の小皿である。釉調はオリーブ色を呈する。215は土師質の蓋。内面はハケメが見られる。154は瓦質の火鉢である。口縁端とその下位に突帯を巡らし、スタンプ文を施す。(以上Fig.12)

92は褐釉を施す陶器壺である。朝鮮王朝の產か。93は口縁を稜花に作る青磁の皿である。95は青磁の菊皿。94は青花の碗である。96、97はいずれも端反りの白磁皿。98は基筒底の青磁皿で、器形は青花皿C群に似るが、やや体部の丸みが強い。また青花皿に比べてかなり厚手である。全体に二次焼成を受けている。100は青花C群の碗である。外面に唐草文、見込に花卉文を描く。99は青花C群の皿。

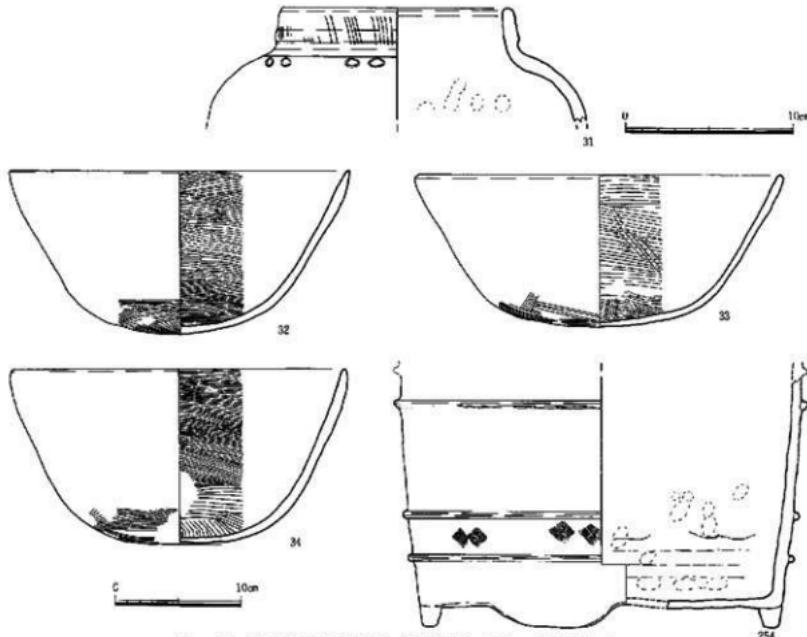


Fig. 15 出土遺物実測図9 (31のみ1:3、他は1:4)

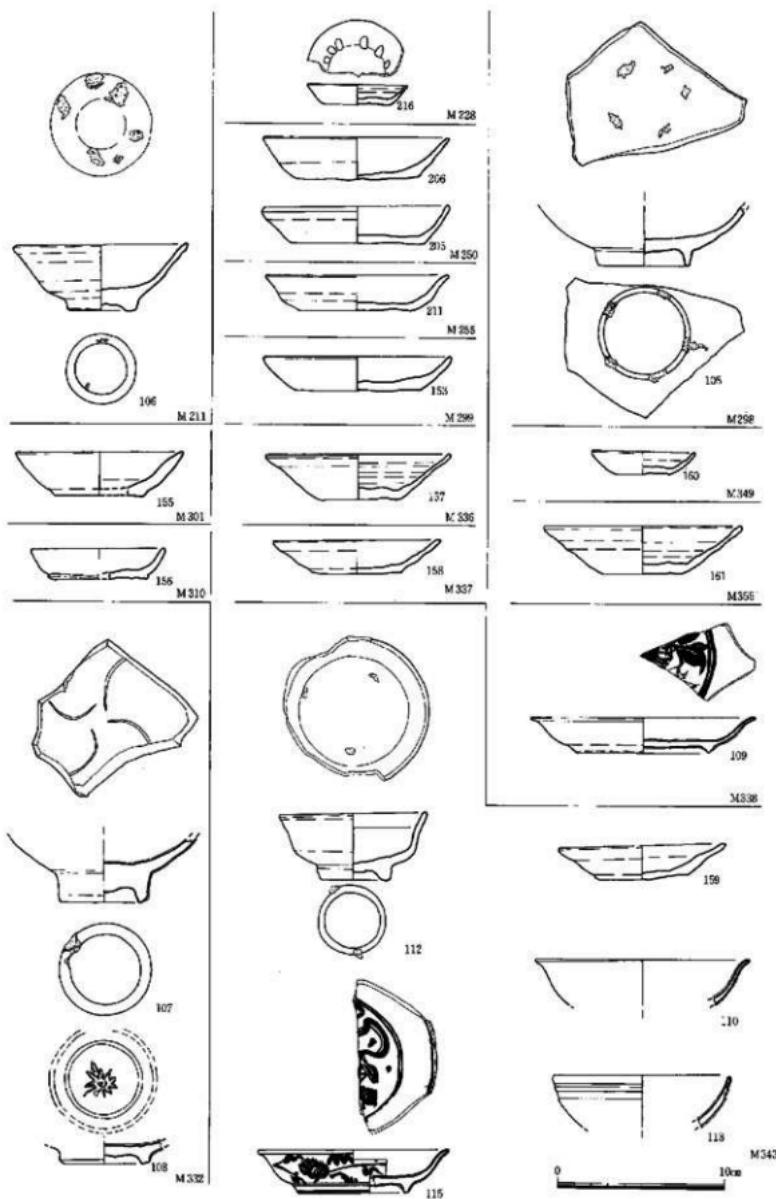


Fig. 16 出土遺物実測図10 (1 : 3)

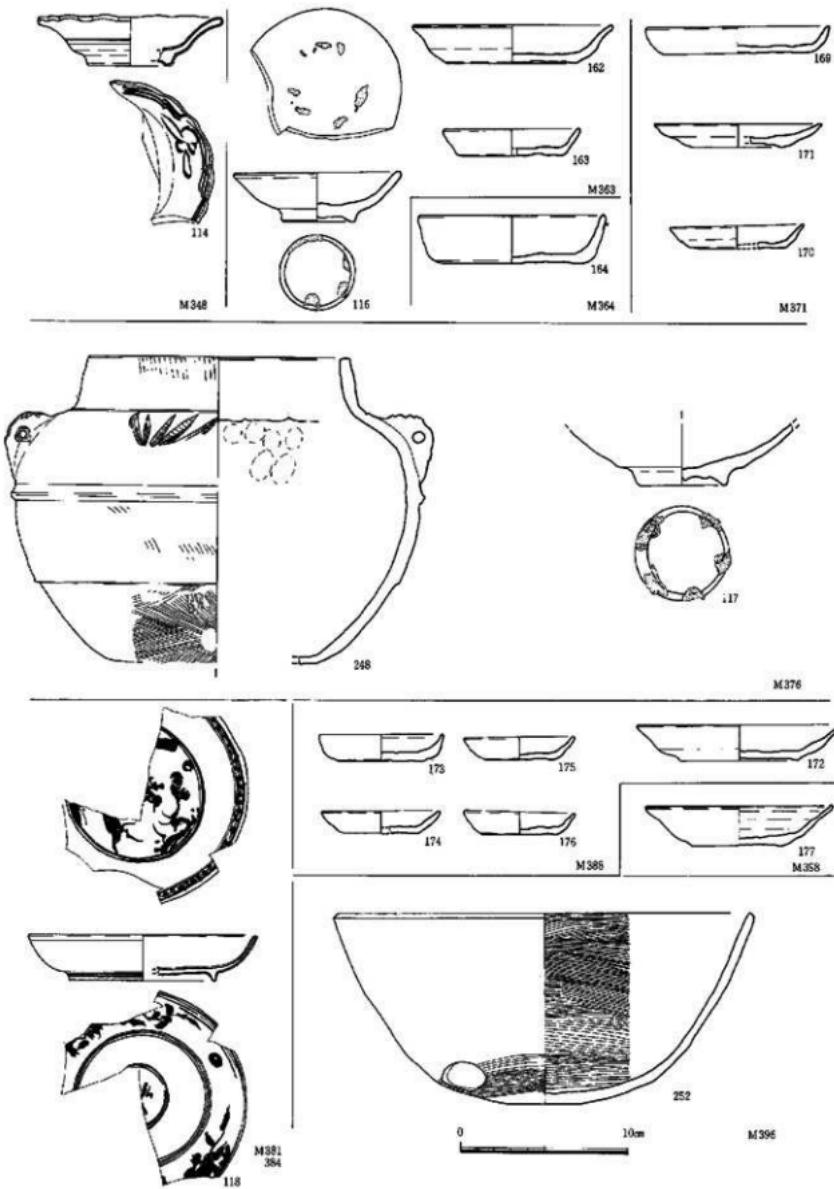
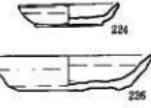
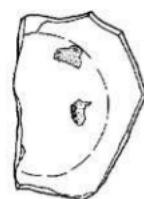
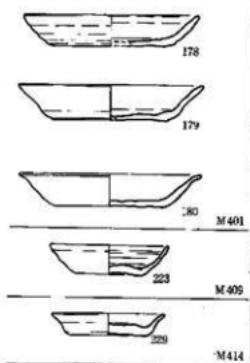
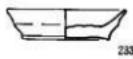
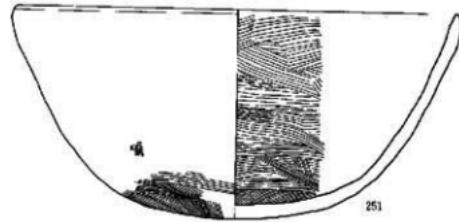
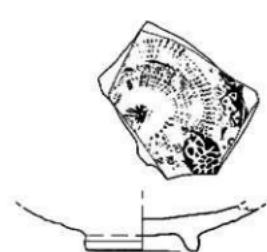
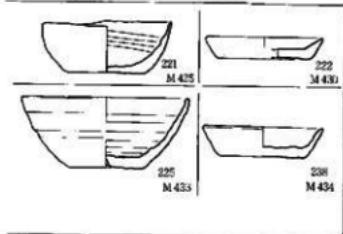


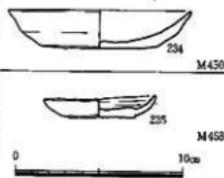
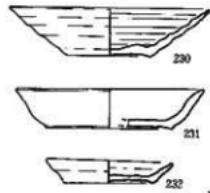
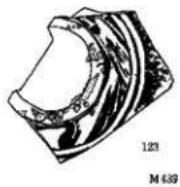
Fig. 17 出土遺物実測図11 (1 : 3)



M410, 411



M422



0 10cm

Fig. 18 出土遺物実測図12 (1 : 3)

外面は梵字文である。102はコバルトブルーの釉調を呈する薄手の精製品である。内面から高台外側まで施釉される。外面は線彫りで草花文が施される。高台内は透明釉で、具須で「(大明嘉)靖(年製)」が描かれる。器形は端反りの皿で、青花皿B群に類似した形になると考えられる。これらの遺物が出土した土壤108は、溝34にきられる土壤であるが、出土遺物の一括性は高いと考えられる。また溝34出土の青花碗54 (Fig.10) は破片が土壤108からも出土しており、これもこの一括に加えられる可能性が高い。(以上Fig.13)

Fig.14、15はI、II面間の包含層出土遺物である。概要は先述したとおりである。上部皿のうち240は外来系であろう。239、197などのような深い碗形を呈するものを含んでいる。132は青花の皿である。外面は線彫りによって青海波文を施す。131は青花C群の碗である。134は青花B群の碗で、高台は内側にすばまる。外面にはラマ蓮弁、見込には十字花文を描く。129はC群の皿。外面に波濤文と芭蕉文を描く。128は口縁が稜花をなす青磁皿である。30は朝鮮王朝の皿。127、126、124も朝鮮王朝の碗である。(以上Fig.14)

31は瓦質の釜である。口縁部外面にハケメが見られ、肩部には円形のスタンプ文が施されている。32、33、34はほぼ同形同人の土師質の土鍋である。凸レンズ状の底部から緩やかに屈曲して体部が立ち上り、直線的に広がってそのまま口縁部に至る。内外面ハケメ調整の後外面の上半部をナデ消している。外面には煤が付着している。254は瓦質の火鉢である。上位と下位に二条づつの突帯が巡るものと考えられる。上位の突帯の下端部には刻目が施されている。下位の突帯間に四菱形のスタンプ文が施されている。(以上Fig.15)

Fig.16~18はII面検出遭埋出土の遺物である。

106は朝鮮王朝の碗である。216の土師器小皿は内面に浅い凹みが見られる。336の土師皿は外来系である。105は白磁の碗。332は青磁の碗。見込に線彫りで巴状に曲線を彫る。底部は厚手で、疊付きから高台内は露胎である。108も青磁の碗。見込に型押しで花文を施す。疊付きから高台内は露胎である。112は朝鮮王朝の腰折れの碗。115はB群の青花皿。外面は牡丹唐草文、見込は玉取獅子文を描く。161の土師皿は外来系である。109はB群の青花皿である。110は白磁皿である。113は青磁の碗である。(以上Fig.16)

114は青磁の皿である。口縁は稜花をなす。内面に簡略な花文を施す。116は朝鮮王朝の皿。162の土師皿には底部に板目が見られ、径も12cmと他に比べてやや大きい。時期的にやや古手のものかもしれない。248は瓦質の茶釜である。口縁部はややすばまる。胴部には最大径付近に突帯が一条巡り、胴部下位にも段が着く。外面はハケメが見られるが、下位の段より上はナデ消されている。突帯の上に釣環があり、文様が施されている。また肩部にも文様が刻まれている。内面は口縁部と体部の境界の粘土接合痕が明瞭に残っている。117は朝鮮王朝の碗である。118は内湾する口縁の青花E群の皿である。外面に花鳥文、見込に山水人物文を描く。高台内には「弘(治年造)」を描く。252は土鍋である。内外面ハケメ調整される。177の土師器皿は外来系である。(以上Fig.17)

221はやや深い碗形を呈する土師器である。225も碗形を呈し、221よりやや大形である。120は青花B群の皿である。119は施釉陶器である。朝鮮王朝產であろうか。見込の周囲に輪状に白色の顔料を施す。123は粉青沙器の底部である。疊付きに砂目が見られる。251は土鍋。230の土師皿は外来系である。(以上Fig.18)

Fig.19には石製品と銅錢のごく一部を図示した。301~304は滑石製の石錘である。小形の301、302と、大形の303、304があるが、いずれも中央の繩掛けの溝を切っている。

401~418は銅錢である。401は元祐通寶(北宋、1086初鑄、以下同じ)、402は至道元寶(北宋、995)、

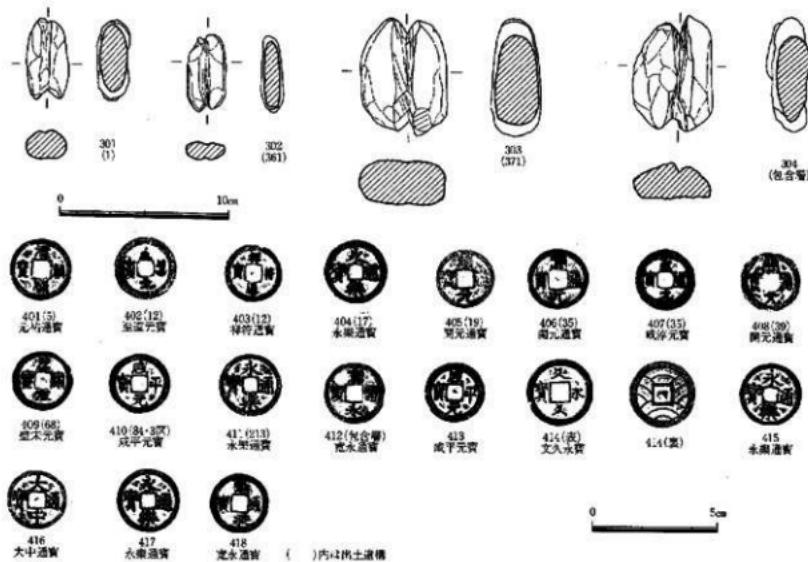


Fig. 19 出土石製品、銅錢実測図 (1 : 2)

403は祥符通寶(北宋、1008)、404は永樂通寶(明、1406)、405、406は開元通寶(唐、621)、407は咸淳元寶(南宋、1265)、408は開元通寶、409は聖宋元寶(北宋、1101)、410は咸平元寶(北宋、998)、411は永樂通寶、412は寛永通寶(江戸、1636)、413は咸平元寶、414は文久元寶(江戸)、これは裏に波の模様がある。415は永樂通寶、416は大中通寶(元、1367)、417は永樂通寶、418は寛永通寶である。

ここに報告したのは出土した遺物の1/4程度であり、まだこの他にも大量の遺物がある。概略だけでも文章で報告しておきたい。不明なところは福岡市埋蔵文化財センターで現物に当たって頂ければ幸いである。

土器、陶磁器類に関してはII面造構ないし包含層が示す相対的に古い時代の遺物については図示した遺物で大略を示したと考える。これより新しい、近世後期を中心とする時期の遺物についてはほとんど示すことができなかった。I面検出の井戸等から、この他に肥前系磁器などを初め、多量に遺物が出土している。また瓦類についても図示することができなかった。瓦は、井筒に使われた井戸瓦の他にも屋根瓦も相当量出土している。軒瓦を見ると、軒丸瓦は円瓦、軒平瓦は唐草文が施される。該期の瓦の編年的研究が近年著しく進歩しているのは承知しているが、検討するまでには至っていない。

この他土製品、石製品、金属製品の多くも掲載することができなかった。土製品の中には土錐が最も高い比率を占めている。大きさには大小あるが、形態的にはみな同じような紡錘形である。また瓦や陶磁器の高台を加工した円盤状の製品も目に付く。銅製品は銅錢の他にはキセルや篠り金具などが見られる。また骨製品として、近隣の60次調査でも出土している断面蒲鉾形の有孔骨製品が出土している。

自然遺物も、獸骨を始めコンテナ1箱程度出土した。まだ同定を行っていないが、刀傷のあるものも含まれ、食用に供されたものがあると考えられる。

4. 小 結

博多82次調査は「息の浜」の端部付近の調査であった。この調査のみでは調査範囲も狭く、息の浜地区の開発についてはまだ不明な点も多いが、近隣の調査成果を参考にしながら、若干のまとめをしておきたい。

息の浜の陸化は42次調査などの知見から11世紀頃と推定されている。該期には大規模な施設が建てるような状況ではなく、水際の仮設的な建物群と推定されている。この後しばらく放置された状況があって、12世紀後半で市街化が進められるようになるという。42次、60次調査地点などでは12世紀後半の遺構をのせる面は風成砂層である。この頃博多浜と息の浜の間に陸橋がつながったことにより、急速に市街化が進められ、遺構、遺物とも博多浜に遜色ない密度を示すようになる。また13世紀代には68次調査地点で元寇防塁との関連が示唆される護岸用の石積遺構が検出されている。

このような息の浜の変遷過程に82次調査地点がどのような関りを持ち、またどのように位置付ければよいであろうか。まず時期的な問題としては、82次調査地点では15世紀を巡る資料は見られない。例外は6世紀後半から7世紀代の須恵器壺身と板目を持つ土器皿であり、これらは泥人と考えてよいだろう。また本調査区では砂丘砂は見られず、II面の乗る砂は海成砂と考えられる。この砂は井戸の壁面などの観察から、完掘した井戸の底面である標高1m付近の深さまで堆積している。この砂の上面は脆弱で、検出した遺構も自然に崩れていくような状況であった。従って82次調査地点では15世紀頃まで息の浜内陸側斜面の11世紀頃と同様な状況にあったのではないだろうか。II面検出の遺構はピット、土壙がほとんどで、建物を把握できていらないものの、ピットの中には礎盤石を持つものが比較的多く見られた。このような小規模建物と、それに伴う廃棄土壙などからなる海岸端の作業場のような景観がII面の景観と考えられる。16世紀後半以前の状況を描いたと言われる聖福寺古岡中の海岸の作業場は位置的にも内容的にも82次調査地点とよく合致するように思われる。

I面とII面を画する包含層は15世紀後半から16世紀代の遺物を包含し、近世遺構を乗せる。この包含層は息の浜の生活域拡大のための整地と考えられる。その契機となつた事が問題であるが、調査者としては16世紀後半に行われたいわゆる大間町割と関連付けたいところであるが、今だその実態や、考古学的知見が少ない現在では、可能性の指摘に止めておきたい。

今回の調査では、近世の遺構、遺物については十分に検討することができなかった。近世初期から後期にかけて、すなわち整地後すぐに市街化され、その後断続なく継続するかどうかという重要な点についても十分明らかにしないといけない。調査区周辺は近世初期の豪商伊藤小左衛門の屋敷地の伝承があるが、関連を示唆するような遺構、遺物も明らかでない。

以上、課題ばかりが目に付く報告書となつたが、機会があれば今後の調査例なども含めてもう一度考えてみたい。

(参考文献)

小野正敏「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」 貿易陶磁研究2 1982 本文中の青花の分類はこの文献によつた。ただし中国および日本のそれぞれの用語に従い、中国産のものを青花、国産のものを染付と呼び分けた。

60次調査 福岡市教育委員会「博多30」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第285集

42次調査 福岡市教育委員会「博多17」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第245集

68次調査 福岡市教育委員会「博多32」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第287集

図 版



(1) I面全景（西から）



(2) 井戸19、20（東から）



(1) 井戸19井戸枠（北から）



(2) 井戸17（西から）



(1) 井戸64（南から）



(2) 井戸40（西から）



(1) 井戸12 (南から)



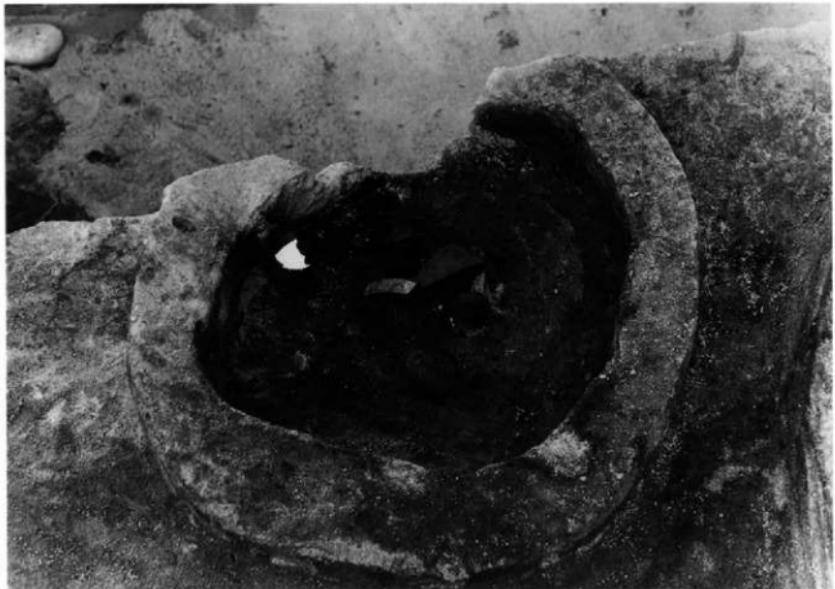
(2) M11~12土層



(1) 井戸86（西から）



(2) 土壙9（北から）



(1) 土壙16 (西から)



(2) 石積遺構 (西から)



(1) 石積43（南から）



(2) 石積93（南から）



(1) II面西半区全景（西から）



(2) II面東半区全景（西から）



(1) 土壌396（西から）



(2) 土壌422（東から）



(1) 土壌411、410 (東から)



(2) 石組453



(1) 石組453 (南から)



(2) 石組453 (西から)



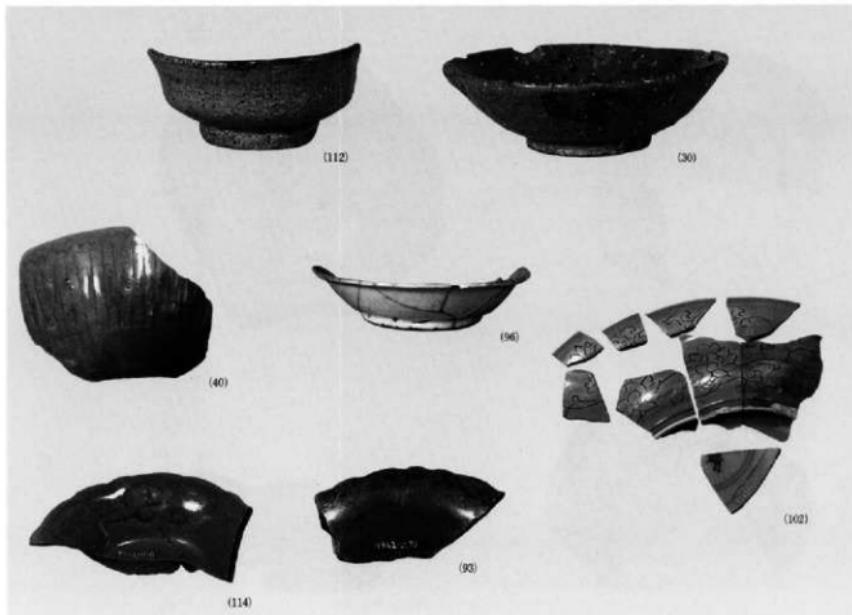
(1) 石組375 (西から)



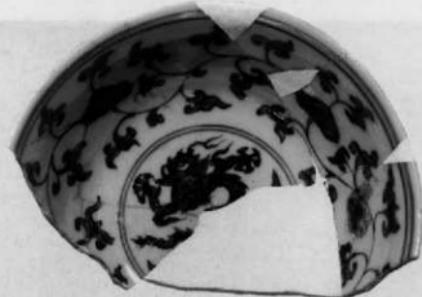
(2) 石組375 (北から)



(1) 石組445(北から)



(2) 出土遺物1

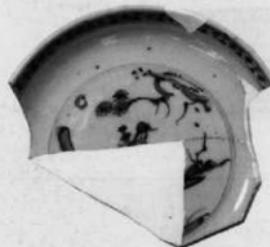


(54)



(62)

(63)



(118)

(125)

博 多 52

—第82次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第449集

1996年3月31日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8-1

印 刷 株式会社ドミックスコーポレーション
福岡市博多区博多駅南六丁目6-1
